

## 第7回「広島日中クラブ」勉強会報告 見本重宏

7月23日14時より、広島日中クラブ主催の共同通信客員論説委員岡田充氏(右写真)の『「尖閣問題」で誰が本当の事を言っているのか』<野中発言・栗山論文・安倍答弁をめぐって>の勉強会・懇親会に出席しました。参議院選挙での自民党圧勝を受け、安倍首相の今後の動向が非常に注目される状況下、領土ナショナリズム問題の核心に触れた講演でした。



講演で岡田氏は、「国民国家の力が弱り空洞化が進む中、領土は可視化できる数少ない国家のシンボルである。同時に人々の思考を、抗うことの出来ない排他的な概念に囲い込み、国家と国民を一体化させる効果がある。それが領土ナショナリズムの魔力である。この魔力を解くには、国家と主権の価値を相対化するしかない。具体的には『棚上げ』である」と述べられました。

日中国交正常化以降の自民党政権時代には、派閥力学により色々な事がありました。実質「棚上げ」を前提にした日中双方の政治経済文化等多方面で交流が進んだと思います。民主党政権時の前原外務大臣が外交文書不在を根拠に「棚上げ」を否定し、それを良い事に安倍政権も踏襲している。その様な中での「棚上げする日中合意があった」の野中廣務氏発言や「決着を付けずに棚上げすべしとの了解があった」栗山尚一氏(1972年田中訪中に条約課長として同行)論文の価値がある。文書が存在しない事で、双方の国家代表が日中の未来を考えた会談での合意を否定してはいけません。その知恵が日中双方の飛躍的發展の礎になったと思います。

日中協会白西理事長は「四つの政治文書」の順守と「二つの紳士協定」を尊重すれば、現状の危機的な日中関係は好転前進すると語られました。紳士協定とは、1986年中曽根内閣時に、日本は総理・外務大臣・官房長官の靖国神社参拝を控えるとした事、「尖閣問題の棚上げ」で暗黙の了解をした事、この二つを指します。

私は、時々、国家の代表が信義の基づいた約束事項を後任首相が否定すれば日本の品格を疑われると思いました。また関西日中平和友好会の会長として初めて「広島日中クラブ」に参加させて頂き、第3回関西日中クラブにご出席して頂いた方々との再会や広島の多方面の方達と懇親を深める事が出来ました。勉強会終了後15名の方々と食事会を開催し、全員が自己紹介を含め持論を展開する等非常に有意義な時間を過ごしました。特に広島日中クラブ代表世話人河尻清様、加藤義明様(広島県日中親善協会会長、榊中電工相談役)、榊堀田組様、盧濤様(広島大学教授)等には大変お世話になりました。更に食事会後8名で3次会を行い、午後10時頃に解散。日中友好団体の地域間交流の必要性を感じた1日でした。

翌日は数年振りにふりかけの三島食品(株)を訪れ、そこで勤務する広島県日中親善協会理事の反田豊明様にお会いする等非常に充実した広島訪問となりました。



講演会



講演会



懇親食事会